

塩崎毛兵衛「最新写真銅版和歌の浦名所図」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 直子, 西本, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1689

塩崎毛兵衛「最新写真銅版和歌の浦名所図」

SHIOZAKI Mohei: Saishin Shasin Douban Wakanoura Meisho-zu

西本 直子*1 西本 真一*2
NISHIMOTO Naoko*1 NISHIMOTO Shinichi*2

あしべ屋 路面電車 「紀伊和歌浦図」
観光開発 森田庄兵衛 「新和歌浦と和歌浦」

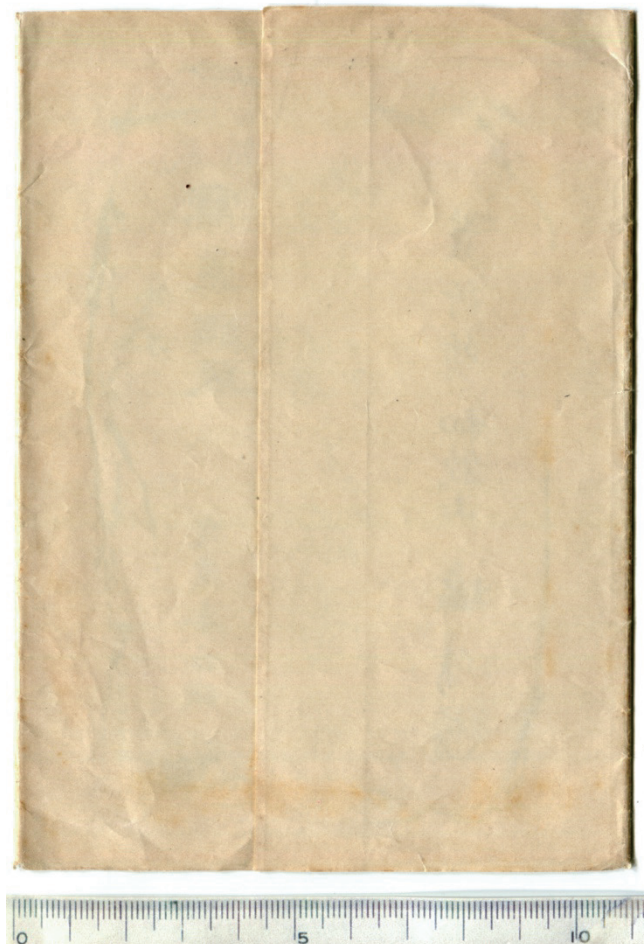
1. はじめに

「最新写真銅版和歌の浦名所図」は塩崎毛兵衛によって明治 42（1909）年に刊行された。この小冊子を出した塩崎毛兵衛に関しては詳細が不明であるが、和歌山で「紀伊和歌浦図」を明治 26（1893）年に出版したことが判明している¹。「紀伊和歌浦図」は、江戸時代に初代紀州藩主の徳川頼宣の命により建てられた茶屋の「あしべ屋」

を源流とする会席旅館のために作成された刊行物である。今回取り上げる「最新写真銅版和歌の浦名所図」もまた、「あしべ屋」の広告を大きな目的のひとつとして編まれたと思われるが、興味深いのは内容をいくらか変えた別の版が存在する点であり、大正時代の末期に「あしべ屋」を買収した同地の旅館「望海楼」の広告を載せているものについても本稿では図版を交え、紹介をおこないたい。



図 1 : 「最新写真銅版和歌の浦名所図あしべ屋」袋の表面



裏面（「あしべ屋」版に付されていたもの）

¹ 国立国会図書館のデジタルコレクション「紀伊和歌浦図」 <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765544>>の奥付などを参照。

*1 建築研究所客員研究員 *2 日本工業大学建築学部教授、サイバー大学客員教授、建築研究所客員研究員

2. 「最新写真銅板和歌の浦名所図」(図1～22)

「最新写真銅板和歌の浦名所図」に関してはすでに拙稿で触れた²。この冊子はあまり広く知られてはいない模様で、この書を引用しているのは、管見では神田氏による論考³が掲げられるのみにとどまり、そこでは市電の路線図が転載されている。「紀伊和歌浦図」には異同がうかがわれ、初版が出された後の明治 29 (1896) 年に改訂版とも言うべきものの刊行が推定されることを以前に記した⁴。改訂版から 13 年後、さらに版を改めて広告としてこの冊子が出版された事情としては、当時の新しい印刷技

術であった銅版を用い、和歌浦の名所を写真で公開することに意義を見出したらしい点が推察される。またその他の大きな理由として「あしべ屋」の間近にまで路面電車が開通したことを喧伝する必要があったと考えられる⁵。

電車の開通を巡っては、米田頼司による論考に詳しい⁶。和歌山市立博物館で開催された市電に関する展覧会の図録⁷も史料を豊富に収めており、近年では和歌浦隧道と市電との関連を示す発表もあった⁸。森田庄兵衛の開発計画については田中修司による論文⁹の他、和歌山大学紀州経済史文化史研究所でもシンポジウムの記録¹⁰を残している。



図2：表紙おもて。「あしべ屋」版



「望海楼」版

² 拙稿「あしべ屋の挨拶状とその他の史料」、『武蔵野大学環境研究所紀要』7、平成 30 (2018) 年、pp. 181-190。

³ 神田孝治「近代期における和歌山市の観光都市化の過程とその背景」、『第9回観光に関する学術研究論文：観光振興や観光交流に対する提言、入選論文集』、財団法人アジア太平洋観光交流センター、平成 15 (2003) 年、pp.1-14。

⁴ 拙稿「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」、『武蔵野大学環境研究所紀要』3、平成 26 (2014) 年、pp. 104-105。

⁵ 西本直子「近代の妹背山：あしべ屋妹背別荘について（明治・大正期を中心に）」、『文化財担当者と学ぶ名勝和歌の浦』、玉津島保存会、平成 29 (2017) 年、pp. 89-99。

⁶ 米田頼司「和歌の浦における明治 40 年代の観光開発と景観保全：電車路線敷設問題をめぐって」、『和歌山大学

教育学部紀要人文科学』61、平成 23 (2011) 年、pp. 9-28。

⁷ 和歌山市立博物館編「市電が走っていた街：開業から廃止まで」、和歌山市立博物館、平成 25 (2013) 年。

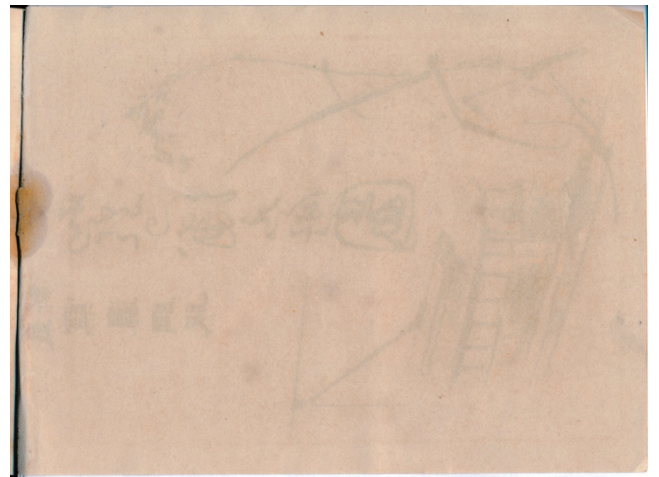
⁸ 武内雅人「隧道が語る森田庄兵衛の新和歌浦開発事業」、『和歌山地方史研究』67、平成 27 (2015) 年、pp. 57-74。

⁹ 田中修司「森田庄兵衛による新和歌浦観光開発について」、『日本建築学会計画系論文集』635、pp. 291-297；同「森田庄兵衛による新和歌浦開発」、前掲書『文化財担当者と学ぶ名勝和歌の浦』、pp. 100-109。

¹⁰ 和歌山大学紀州経済史文化史研究所「小特集 公開シンポジウム『森田庄兵衛の新和歌浦開発事業』」、『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』36、平成 27 (2015) 年、pp. 1-21。



図3：表紙裏。「あしべ屋」版（以下、ブランクは省略）



「望海楼」版

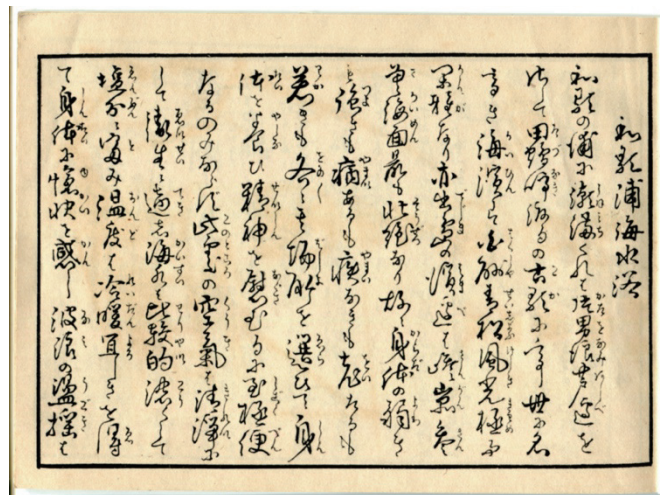
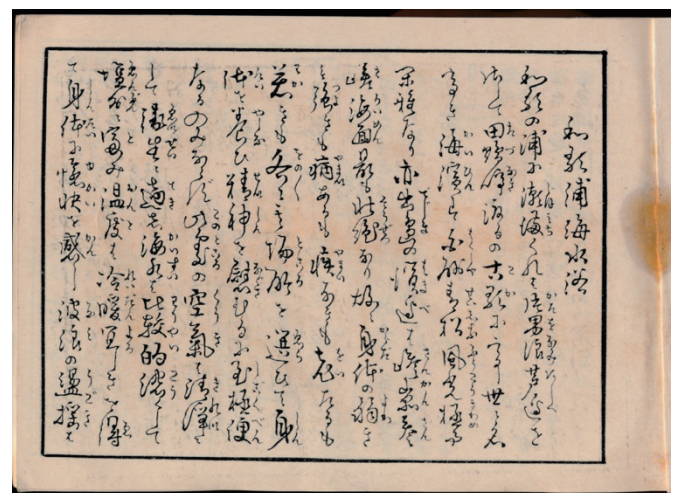


図4：1ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版

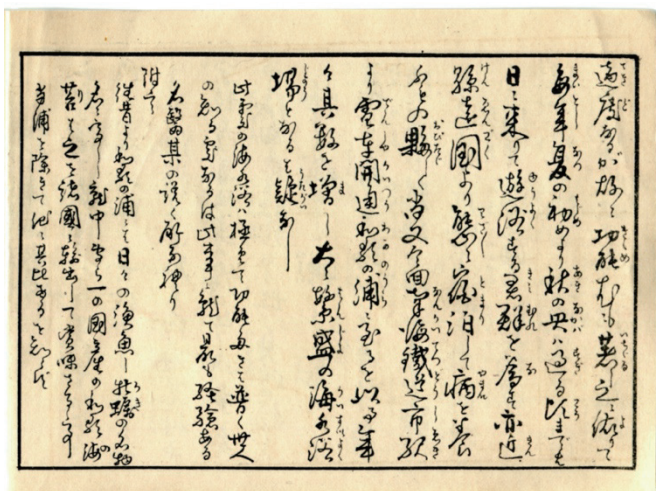
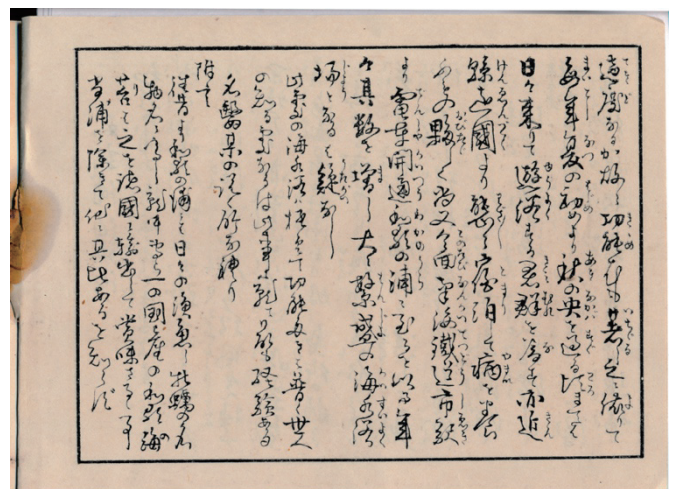


図5：2ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版

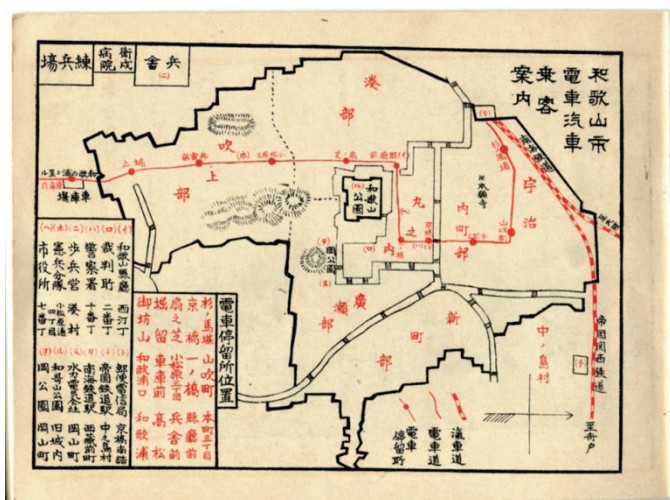
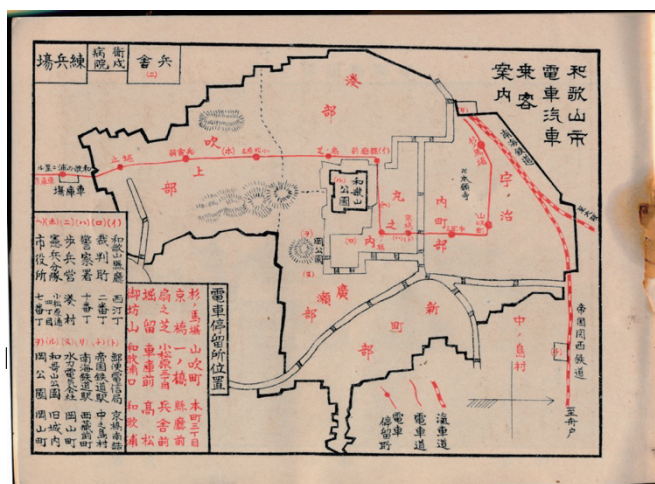


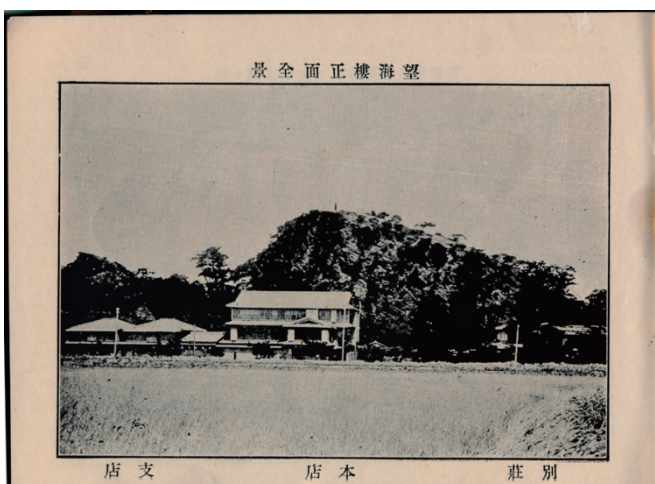
図6：3ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図7：5ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版

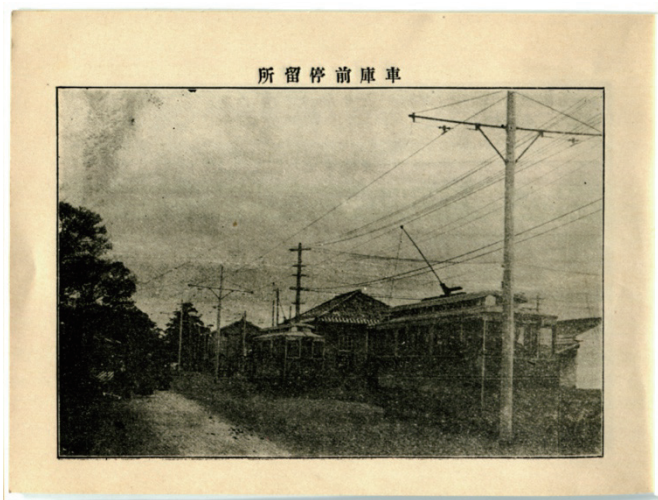


図8：7ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図9：9ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図10：11ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



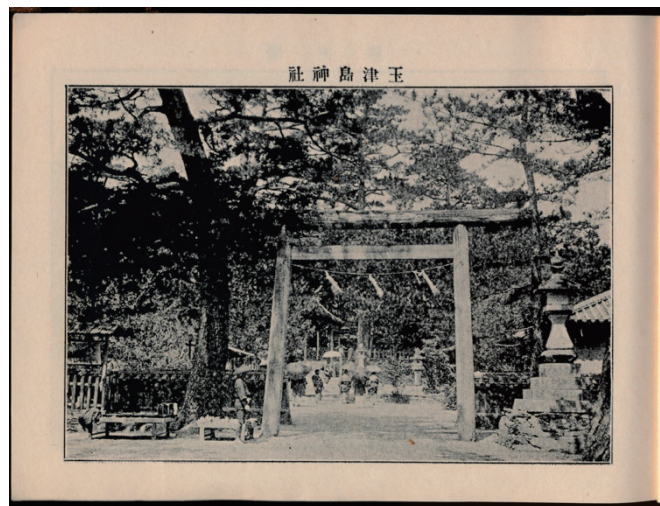
図11：13ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図12: 15ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図13: 17ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図14: 19ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版

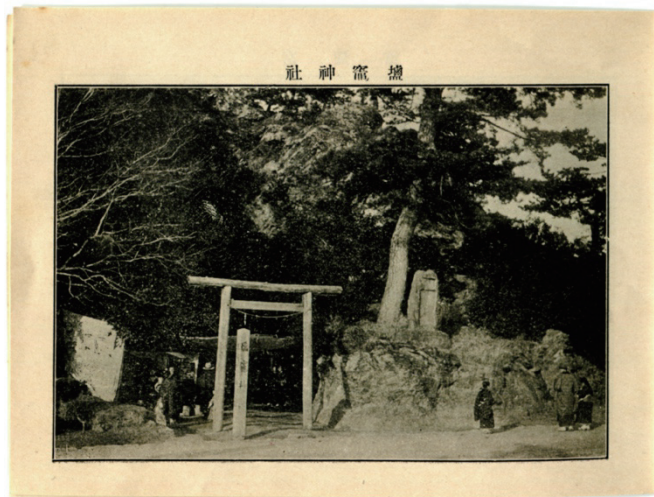


図15: 21ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版

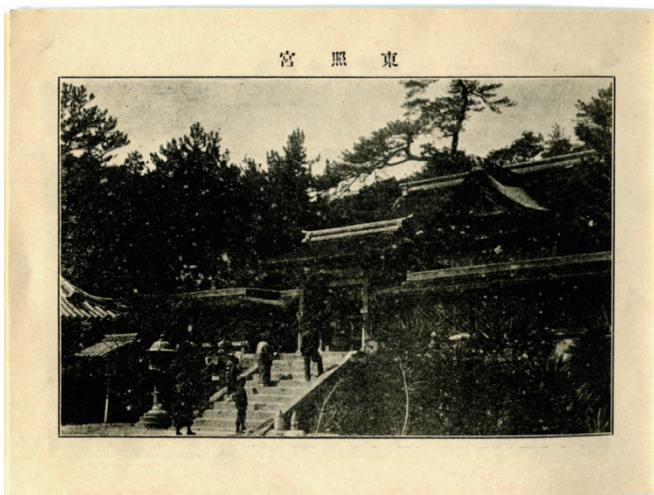


図16: 23ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版

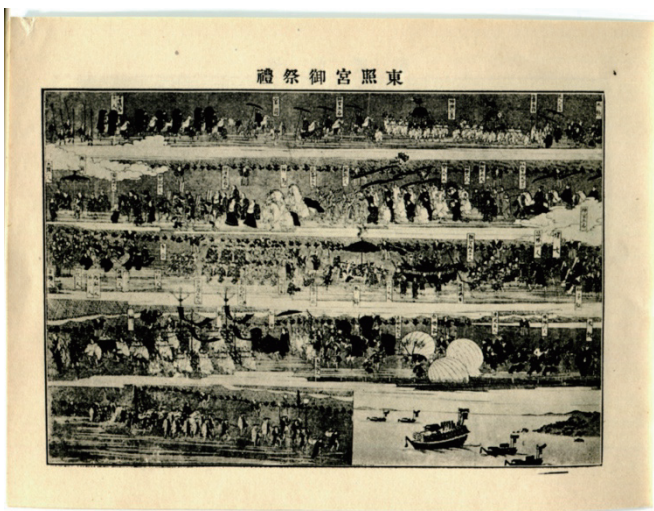
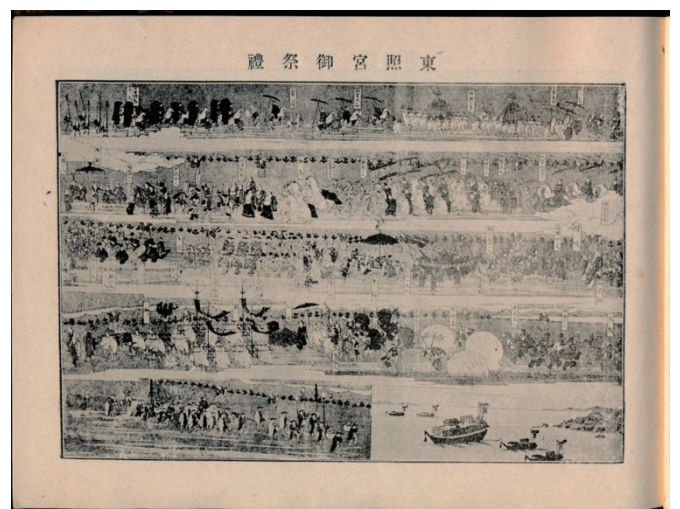


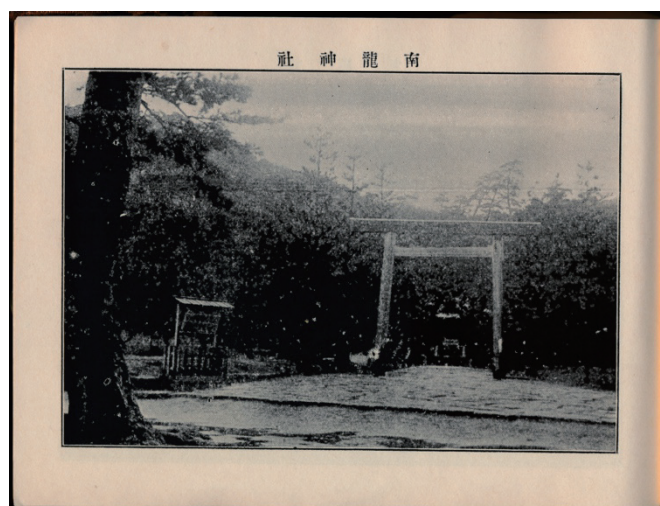
図17: 25ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図18：27ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図19：29ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図20：31ページ。「あしべ屋」版



「望海楼」版

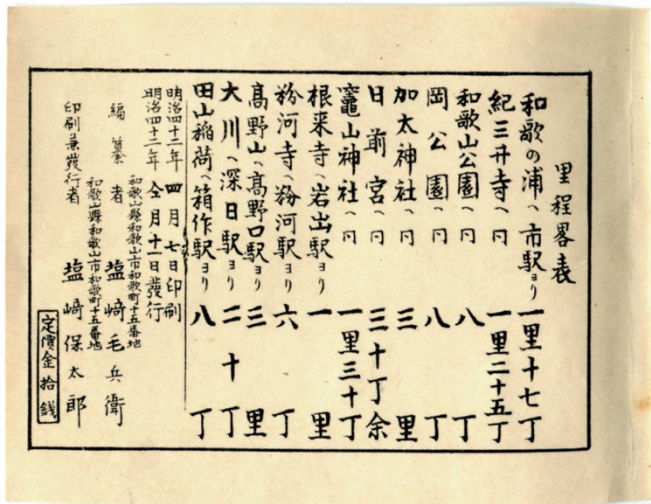
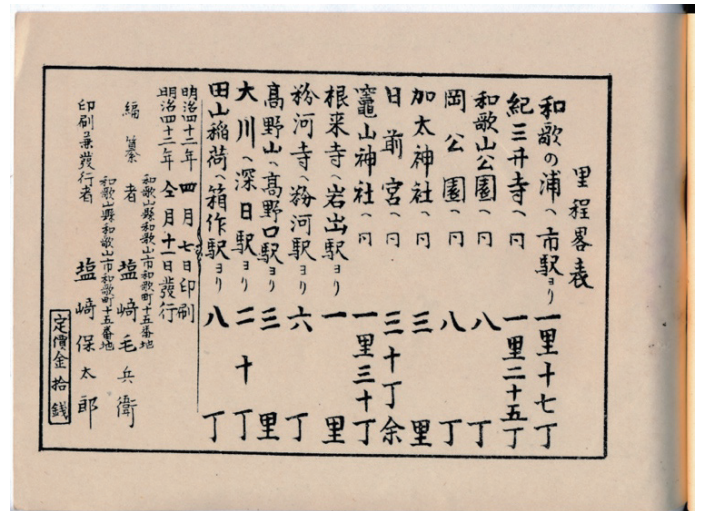


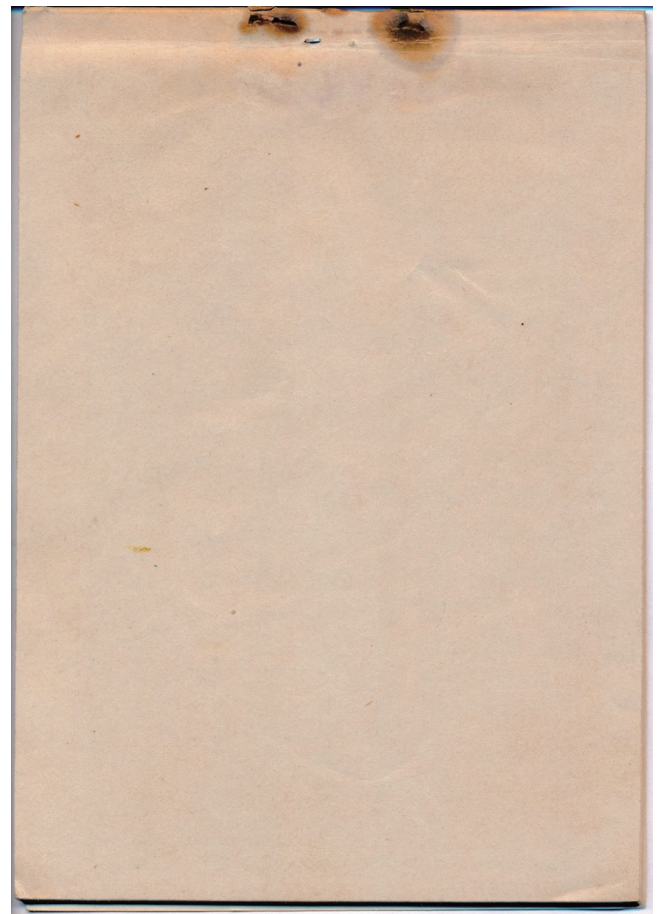
図21：33ページ、奥付。「あしべ屋」版



「望海楼」版



図22：裏表紙。「あしべ屋」版



「望海楼」版

「あしべ屋」の広告が挿入されているものを「あしべ屋」版とし、「望海楼」の広告が掲載されているものを「望海楼」版と仮称して併置させ、比較の便宜を高めることを試みた。奥付にて明瞭な通り、編纂者は「紀伊和歌浦図」と同じく塩崎毛兵衛で、発行者が塩崎保太郎であることも、また記された住所についても変わりがない。

この事実は、ふたつの版の制作に双方の旅館が関わっていたことを仄めかしているように思われる。示し合わせてふたつの版を別々に作成したのであり、例えば口上の終わりには「當舖を除きて他二其比あるを知らず」(図5)などと書かれているが、「あしべ屋」と「望海楼」の両方で同じこの文言を使い回しているわけである。

先に出版された「紀伊和歌浦図」を改めて見直すと、「最新写真銅板和歌の浦名所図」で扱われている名所は「紀伊和歌浦図」を踏襲しており、しかも大きな変更が加えられていない点に注意が惹かれる。二色刷とした「最新写真銅板和歌の浦名所図」の袋(図1)の表には和歌浦の象徴とも見做される葦とハクセンシオオマネキ¹¹をあしらい、表紙(図2)には葦と路面電車を描いており、この点は「紀伊和歌浦図」には見られない構図である。しかし最初に提示される口上(図4、5)や東照宮御祭礼(和歌祭)の行列の提示(図17)、また末尾に引用された「里程略表」(図21)など、基本的な構成はまったく同じであると考えて良い。

「紀伊和歌浦図」には「あしべ屋」版の他に「米栄」版があった。また浜口弥による「新和歌浦と和歌浦」¹²では「あしべ屋」版の他に「米栄」版と「望海楼」版がうかがわれた¹³。明治・大正時代においては、このように異版が数多く存在したらしきと思われる。しかし詳細に関しては明らかでない。今後における研究の進展が俟たれる。

3. おわりに

市電の開通によって観光に力を注いでいた地域には転換期が訪れることとなり、その様子が当該冊子には良く映し出されていると判断されよう。森田庄兵衛によって提案された開発計画は新和歌浦を対象としていたが、それはすなわち和歌浦地域の衰退を呼び起こす引き金にもなりかねないものであった。市電の開通によって生じた和歌浦のさらなる隆盛の機運も、軌道の延伸計画に伴い、新和歌浦を主とする他所へと大勢の観光客が奪い去られる危険性もあったはずである。

本書は和歌浦地域にとどまらず、同じ頃に各所で似たようなことが起こったに違いない観光名所での問題点の考察を進める上で重要である。国会図書館にも未だ収蔵がなされていない小冊子であるものの、地方史・交通史・観光史・出版史等を含む多方面から注目される著作であると評価される。

引用文献

神田孝治「近代期における和歌山市の観光都市化の過程とその背景」(一席入選論文)、『第9回観光に関する学術研究論文：観光振興や観光交流に対する提言、入選論文集』、財団法人アジア太平洋観光交流センター、平成15(2003)年。ネット URL <http://www.aptec.or.jp/image/activities3/28-1.pdf> (閲覧日：2022年1月11日)。

¹¹ 前田正明「和歌の浦のもう一つのシンボル」、和歌山県立博物館ニュース、2012年12月22日、ウェブサイト URL <http://kenpakunews.blog120.fc2.com/blog-entry-548.html?sp> (閲覧日：2022年1月11日)。

¹² 浜口弥「新和歌浦と和歌浦」、枇榔助弥生堂、大正8

塩崎毛兵衛「紀伊和歌浦図」、塩崎保太郎、明治26(1893)年。

塩崎毛兵衛「最新写真銅板和歌の浦名所図」、塩崎保太郎、明治42(1909)年。

武内雅人「隧道が語る森田庄兵衛の新和歌浦開発事業」、『和歌山地方史研究』67、平成27(2015)年、pp.57-74。

田中修司「森田庄兵衛による新和歌浦観光開発について」、『日本建築学会計画系論文集』635、pp.291-297。玉津島保存会『文化財担当者と学ぶ名勝和歌の浦』、平成29(2017)年。

西本真一・西本直子「あしべ屋の挨拶状とその他の史料」、『武蔵野大学環境研究所紀要』7、平成30(2018)年、pp.181-190。

西本真一・西本直子「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」、『武蔵野大学環境研究所紀要』3、平成26(2014)年、pp.99-115。

浜口弥「新和歌浦と和歌浦」、枇榔助弥生堂、大正8(1919)年。

前田正明「和歌の浦のもう一つのシンボル」、和歌山県立博物館ニュース、2012年12月22日。ネット URL <http://kenpakunews.blog120.fc2.com/blog-entry-548.html?sp> (閲覧日：2022年1月11日)。

米田頼司「和歌の浦における明治40年代の観光開発と景観保全：電車路線敷設問題をめぐって」、『和歌山大学教育学部紀要人文科学』61、平成23(2011)年、pp.9-28。

和歌山市立博物館編「市電が走っていた街：開業から廃止まで」、和歌山市立博物館、平成25(2013)年。

和歌山大学紀州経済史文化史研究所「小特集 公開シンポジウム『森田庄兵衛の新和歌浦開発事業』」、『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』36、平成27(2015)年、pp.1-21。

(1919)年。国会図書館デジタルコレクション「新和歌浦と和歌浦」も参照。

¹³ 拙稿「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」、『武蔵野大学環境研究所紀要』3、平成26(2014)年、pp.104-106。